

室生犀星未刊行作品集

奥野健男
室生朝子
星野晃一
編

室生犀星未刊行作品集

第三卷

三
弥井書店

室生犀星未刊行作品集 第三卷

定価六八〇〇円

昭和六十三年二月二十八日 第一刷発行

著 者 室 生 犀 星

発 行 者 吉 田 榮 治

発 行 所 株式会社 三 弥 井 書 店

〒一〇八 東京都港区三田三二一六
電話 東京(〇三)四五二八〇六九

振替 東京九一二二二五

組版 錦凸版印刷
印刷 三洋アール

乱丁・落丁本はお取替えいたします

ISBN 4-8382-5003-7 C3391 ¥ 6800 E

目次

喫茶と花と	7
別れ	12
應酬	18
驚	24
或夫婦	33
或女の備忘録	42
金曜日	58
母の死と前後	62
選料—自叙傳補遺—	72
海邊にて—自叙傳補遺—	80
或女の手記	98
或日の芭蕉	122
出發前の出來事	126
浮氣な文明	129
假面	148

鉤と餌	166
女をすてる	174
ユキ子は食はねばならない	181
足・デバート・女	197
巴丹杏と市民	214
美青年記	228
自殺	248
殺意	265
白い蛆と勇士	290
接吻痣	314
化粧した交際法	328
ピアノの町	344
大名と錢	358
殺られる人々	372
死のツラを見よ	387

説 解

解 題

.....

423 413

室生犀星未刊行作品集

昭和 I
(昭和 2 年～昭和 7 年)

喫茶と花と

駒込白山の坂上に甘美しい茶を喫ませる喫茶店があつた。化粧小間物屋を二等分に劃つた明るい店で、鈴木が未だ市井に放浪してゐたところから、今までに十五年は經つてゐる昔馴染の店であつた。

鈴木は夕食後、白山まで歩いて其處で茶を喫んで歸るのが腹こなしに恰度好いのであつたが、白山といふところは左うでなくとも誰かに會ひさうな町であつた。昔の人、昔見た女の人に逢ひさうな通りだつた。鈴木に興味に依ればそれだけの考へを有つだけでも、この通りは様様な記憶をその明るい店々の華美な飾りある窓の中に残してゐた。鈴木は周囲の、幸田や弓島などといふ彫刻をやる當時美術學校の生徒であつた彼等は、團子坂の邊に下宿の集をつくらうて、夕方には白山や肴町へ散歩に出掛るのであつた。駒込の暗い通りから、その當時電車も通らない狭い白山へ出ると急に明るい輝いた通りになつてゐた。それゆゑ誰言ふとなく駒込ロンドンと名づけて

ゐた。

昔馴染みの店といへば、この喫茶店の向側に胸紐や帯じめ、手柄や伊達巻をも陳列べてある小さい紅屋があつた。そこに天平式の顔立ちをしてゐるお家内さんが坐つて居て、何時も肥つたたつぷりした體軀を冬は火鉢の傍に片寄せ、古い昔女のやうに白い片手を招猫のやうに火に翳し乍ら、何やら考へ込んで、時折、迫らない寛ぐりした眼付で往來の方を眺めてはゐた。——一人者の常としてこゝろふ女の人を店先に眺めることは、生優しい温室の微風に吹れるやうに楽しみ深いものであつた。いま佛蘭西にある幸田はその天平式に感激して、よく鈴木と出掛けては此の駒込ロンドンの光景に一生彩を感じたものであつた。

それと向ひ合うた今の化粧品屋のお内室も、瘡形ではあるが血色のよい、襟元のきちんとした女の人であつた。眼は大きくないが怜しく美しくあつた。鈴木は腹の痛くないときに腹痛の藥を買ひ、その徴候もないのに下痢止の藥劑を求めるのであつたが、匂の好い、心から望んでゐる香水は買へなかつた。若し鈴木がしたゝか國元から金を取り寄せられる身分でもあつたら、或は香水を求め

てその匂ひを興しみ嗅いでゐたであらうにと、今も思ひめぐらすのであつた。

「さういふ譯で此通りは好きなんだ、帳場に坐つてゐるのが此處のお内室さんだ。いまでは左う美しくないが、あゝいふ顔立の女の人といふものは、むかしどんなに眼立つた美しい女だつたかといふことを想像させるものだよ。」

鈴木は帳場にゐる小柄な、その昔の人を眺めるのだつた。女の子供が二人、その直ぐそばの椅子で、學校の復習を母親である、彼女と語らひながらしてゐる、——彼女はまさしく老けて見えるが、昔、綺麗な人であつたことは誰の目にも感じられるものを未だ仄かではあるが、具へてゐた。

「幾つくらゐでせうね、」

「四十三四くらゐかね、四十三から十五年前の十五を引くとすると、幾つになるかね。」

「四十三から十五引くと、二十八ですね。」

「二十八ではない、たしかに彼の頃は二十三くらゐだつたから、二十二に十五加へると三十七だ、そんな年かも知れん、どうも綺麗のよい女の三十七八ころは一寸歳

を當てにくいものぢやないか。」

鈴木は今夜初めて連れ立つた年少の友に、甘美い紅茶を侑め、この茶はどうかねと尋ねて見た。

「なるほど、これは却々うまい茶です。」

「レモンの匂ひもいい。」

その内、外から二人の少女がお揃への格子縞の着物で這入つて来て、物慣れた容子で對ひ合うて茶を命じた。

まだ十五六くらゐであらう、姉妹のやうに顔容や様子がやや似交うてゐて、その癖全くの他人のやうなところもある少女であつた。少女が少女である所以のものを完膚なきまでに整へた二人は、よく手入れのついた皮膚には化粧はしてゐなかつたが、天井から射落ちる電燈にてらから光り、光り過ぎたところは色のないきらきらの光そのものに見えた。

「お湯のかへりでせうか。」

年少の友は餘りに血色のよい少女を湯がへりと思うたらしかつた。

彼女は茶碗を少し空いた胸元のあたりに持ち上げ乍ら、氣障でない程度の物靜かさで、その熱い紅茶を少しづつ舌の先でさましながら、それが適度な熱さになつたころ又舌の先で卷いて喉もとへ送り込むのであつた。その落

着きと淑やかさと、西洋流の教養とでも言ふやうな物腰が鈴木の若い時分に見られぬ光景であつた。さういふ娘は鈴木の書生時分には見られなかつた。それが今は何一つ不思議でないものに習慣づけられてゐるのも、鈴木には今更に物珍らしい氣がするのであつた。

「落着いたものだね。」

「この頃の娘らはみんな彼嬖風あんなですよ。」

二人の少女は間もなく卓を離れると、紅つづれの紙入れの中から、お茶の代をお互ひが一人前づゝ出し合つて拂ひ、悠然とドアのそとへ鷹揚げな容子で出て行つた。

「そのころ弓島といふ彫刻をやる男がゐてね、學校を出てから永い間先輩の助手なぞしてゐたが、天才と云ふのか、變に同窓の友人から輕蔑と尊敬とを取交せて受けてゐる男がゐるが、——その男なぞも天平式を崇拜してゐたものだよ。」

弓島はいまの動坂町のゴミゴミした或る灰屋の二階に住んでゐて、先輩の仕事へも手傳に行かず、又、誰とも友人には會はないでゐた時があつた。鈴木だけでも全る一年くらゐ會はないでゐた。最う國からの仕送りもない弓島は一たいどうして食つてゐるのか、さういふ話は度

度友人の間で噂されたが、誰一人訪ねて見ようとする者がゐなかつた。牛のやうに黙つた或る力を潛ませたやうな、それ故一見馬鹿々々しいやうな男であつた。皆は弓島のことを話合ふと、しまひには天才だか鈍物なのか、鋭利な頭をしてゐるのか、少し鈍なのか、見當のつかないところもあつた。しかし土を握るとよい彫刻を制作した。好いといふより弓島らしい無雜作の中に克明さと落着きや素直さの現はれてゐる作品であつた。何よりも彼らしく、彼より他のものでないところが物珍らしかつた。と言つても彼のことは説明されないが、普通一般向きでないところのもの、また標準を假定しないところの彼の彼らしさに、友人は一般的である批評よりも幾らか割引した認め方をしてゐるのであつた。

その内、或る友人なぞは弓島の事を話したが、鈴木には鳥渡とりど驚くやうな突飛な事柄であつた。

「弓島はゴミ箱をあさつて歩いてゐるといふぢやないか？」

「まさか、」

「いや、實際に見つけた人があるさうだ。」

その友人の話は春まだ寒い頃のことだつたが、鈴木は妙に信じなかつたけれど笑へなかつた。鈴木は何となく

氣懸りがして數日の後に弓島の宿を訪ねて見たが、彼は午後二時だといふのに未だ床の中に寝てゐた、一枚明けた雨戸から春近い日ざしが流れ込み、石膏の型を取つた少女の裸體が日ざしを浴びうそ寒げに枕元に立つてゐた。鈴木は部屋の中に金に代へるものの無いらしい様子に氣附いたものの、悠然としてゐる弓島を見ると、あんな噂は誰かが見違へたものか、或は捏造したものと思はれなかつた。弓島は食へなくとも寝てゐる人物だといふ事を、確めることが出来るのであつた。

「やあ、——」

弓島は床の中から左う聲をかけた。

「健全かね。」

「さうだな。」彼は寧ろ無雜作に笑つて見せた。「健全でもないね。」

「何か作つてゐるか？」

「モデルは來て呉れないし、食へないし弱つてゐる。」

弓島は併し元氣だつた。何か作らうといふ氣もちは絶えずあるらしかつた。弓島は寢床の中に懊惱してゐても、何か矢張り天才のやうな鈍重な顔と物憂い眼付をしてゐた。鈴木は弓島と別れて宿を出たときも、やはり天才かなと思つた。理由なく左う思うたのである。しかし鈴木

の考へた天才は相手を上から見下したやうな見方であることに、彼自身氣附いて見て不愉快に思つたのであつた。

弓島は震災前二年に帝展に彫刻を出品した。

鈴木はその作品はつい見紛らしかしたが、弓島の爲めにその成功の一端を喜んだ位である。そして間もなく弓島は氣が違つたといふことを聞いたが、歸國してから何の便りもなかつた。貧乏の中で磨いた彼の天才、——人々から期待されてゐた天才の幕はたうとう卸されたのである。動坂の石灰屋の二階で終日寝てゐた彼の枕元に、石膏の裸婦が立つてゐることだけを今でも覺えてゐる、——ともかくも彼はその少女の像の下でさびしく寝てゐたのである。明治から大正七八年の年代の藝術志願者の多くは、絶望や窮乏の果は大概の場合寝てくらししたものらしかつた。鈴木もその一人であつたことは疑へない、

「その弓島なぞはたうとう世の中へ出られなかつたのだね、行き着いて再びこの駒込ロンドンの變遷を知らない譯さ。あの時分は電車は無かつたし、明るさもこんなに明るくはなかつた。夕方には妙清寺の太鼓の音が往來を

歩いてゐると聞えて来て、何となく淋しい田舎の町を歩いてゐるやうな氣がした。今は電車の音響で聞えなくなつたが、……僕なぞ何時着られるか分らない的の無い注文をして、吉田屋で着物をあつらへたものだつたが、そんな事もこの通りへ來ると思ひ出される。」

「妙清寺といへばあのお寺の中に土藏があつて、その二階に僕は住んだことがある。夏のことで暑かつた。美しい尼さんがゐて毎日お經を上げてゐたが、土藏の二階で僕はあてのない繪を書いて、スケッチ板を一枚一圓づつに賣つて歩いたのも、今でも覚えてゐる。高村光太郎君が外國から歸つた當時だつたが、僕らも何となく刺戟されたものだ。僕はふしぎに高村君が好きだつた。あの工房も最う十五年も経つだらうが、彼はあの中で納まり返つてゐるのが羨しかつた。今から考へると彼のころの高村君よりか、今の白髯を交へた高村君の方が適かに人氣の外にゐて奥床しくて好きだが、若い時分はむやみに好きだつた。つまり高村君を好くよりもハイカラが好きだつたのだね。此間久しぶりで林町の通りを夜おそく歸つたが、彼の家の玄關の上に小さい窓があつて灯がついてゐてね、むかしの自分のことが思ひ出され、色々な考へ事を思ひ出したが、それほど彼のアトリエは僕らを刺

戟したものだ。灯はむかしに似て點れ、人もまた同じ人なれど……と云ふ奴さ。滅多に會はないが會はなくとも高村君は好きな人だ。」

鈴木は茶をもう一杯命じたが、何時の間に次々の客が行つてしまひ、もう鈴木のみが残つた。

「そんな譯でこの通りを好きになつたのではないが、見たまへ、すぐ向側に花屋が一軒あるだらう、あそこは花が何時でも豊富でね、どんな冬の最中でも春の花で一杯なんだ、ああいふ花を部屋に生けて置くことは嫌ひだが、通りがかりに見るのはいいものだよ。」

鈴木は紅屋の隣にある花屋の前を何時も彩の複雑な一枚のシヨオルの様に、町の肩さきに温くかかつてゐるのを美しいと思うた。時たま、歩みを止めて破璃窓を覗き込んで様々の花の色や形に見惚れ、心にまで色の落ちて映るのを喜んだものであつた。

「この通りであの花屋を知らない人はないでせう。」

「いつまでも心に残つてゐるものだね。別に買はうといふ氣はしないが、花屋といふものはそれでもいいものぢやないか。」

「向ふぢや其だけでは困るでせうが、こつちはそれで澤

山ですね。」

「商賣をしながら人を喜ばせる、——」

鈴木は左ういふ徳を有つてゐる商賣は、商賣の中でも生きてゐると思うた。そして今夜は何か久しぶりで花を一束買つて歸らうかと思うた。さういふ花を買ふ氣は永い間散歩の途上で経験したことは無いのだが、ふしぎに今夜はその氣もちになるのだつた。彼は花屋の中へづかづかと這入つて行つた。女學校の放課後の群に行き逢うたやうに、色々の花が彼の眼の前にあつた。

別 れ

八月もあと一週間ほどになると、前庭の山松の下陰に蟲の音が繁くなり、晝の日ざしの中でも低い鳴きこゑがした。夕方、水島の奥さんが車で見えられた。

「けふは、お別れにまゐりましたの。どうも道が悪くて、車ひつかりかへが覆りさうでございました。」

昨夜の雨で砂が流れて、穴や窪みばかりの道路に、折柄の深い夕霧が下りて一間先きが分らなかつた。二千七百尺もある高原の霧は、まるで雪のやうに濃く深かつた。「いっつお發ちでございます。」

「やはり明日にしようと思ひます。荷物はさきに出してしまひましたから、樂でございます。」

水島の奥さんは毎年この山中の別荘へ來るのだが、秋本の妻と懇意の仲であつた。四十を出た奥さんであつたが、何か白木槿のやうな感じのする清楚な人であつた。やつと一夏四五度の往復に過ぎないけれど、秋めいた山中の避暑地を先きに發たれることは、鳥渡とりわたりした氣別れを

感じるものであつた。

「來年はあさちやんも大きくおなりでせうね。」

「え、もういたづらでございましてね。」

子供はだいぶ馴染んではゐるものゝ女の子らしく羞かしがつて母親の膝へもたれかゝつて、わざとらしく甘えて見せた。

「いつもあなたのことを靴下のをばちやんと申しますのよ、さうでせう、靴下のをばちやんでせう。」

いつか水島さんから白い絹の靴下を貰つてから、さう子供はいうてゐるが、いまは何もいはないで、流れるやうに甘えて、とろりとしてゐるやうであつた。

「ではわたくし、まだ行きたいところもございますから、來年またお目にかゝることにしまして、——來年また入らつしやいましてな。」

子供にさういひ、光るものゝ嵌つた指さきで、頬を叩いて見せた。

「段々さびしくなりますね。」

妻はさういひ玄關に出た。

「きのふの雨でお發ちになる方がずいぶん多うございまして。」

そとの霧の中に車やの提灯がぼやけて松の間に見えた。

いつも懷中電燈で送つてゆく秋本は、今日はそれをしないで立つたまゝ挨拶をした。

車は山道をゆれながら林の中に提灯のあかしが消えた。翌朝、冷たい雨が落葉松に注いで、薄ら寒い秋めいた涼風が簾を揺ぶつた。秋本の借りた家は西洋人の別荘に取り圍まれてゐたので往き來のひとは大概白衣の洋人であつた。迂曲した道へ突然に人力車が一台下りて來て、その上に乗つてゐる西洋人が右の手を上げて

「ぐつとばい！」

といつてうしろを向いて呼んだ。やゝ遠くの若い櫟林の中からも「ぐつとばい。」といふ高い西洋女の聲が繰返された。秋本はトランクを膝の間に抱いたその女のひとが林の中に消えるまで見送つた。

「段々かへる人が多くなるね。」

朝飯の時に庭から採つた胡瓜に鹽をつけ、それを食べながらこゝのきうりのうまいことを話しながらゐると、お隣の宣教師のうちに朝のさんびかの合唱が初まつた。

三組くらゐの老夫婦が二階と階下とを借り合つて夏を避けてゐるのだが、笑ひ聲の起こらない静かな暮しであつた。たゞ、朝と晩とにさんびかが歌はれるくらゐで、それも老人達であるから仲々落着いた調子で、オルガンに

は何時も白髪のお婦人が坐つてゐた。

「けさのさんびかは仲々いゝな、秋が来たやうだ。」

秋本は身にしみてさういうたが、妻はきのふ裏の方から食堂を見たら、キッチンと六人のひとが椅子に向うて規則正しく食事をしてゐたといつた。

「あのひと達はどうしてあゝ花が好きなんでせう。」

「好きも嫌ひもないよ、年とつても氣心が派手な連中だからな。」

一人の老人は終日新聞を露臺に出ていつまでもかゝつて読み、一人のお婦は庭の木かげの椅子で編ものや讀書をしてゐたが、女中を呼ぶときお寺に用ゐる鐺鈴を鳴らした。パン一きれでも神に感謝してたべてゐるらしい暮しだつた。老て異國の避暑地に餘生を送つてゐるこのひと達の靜さは、秋本には好意が持てた。

反對の下隣は朝から蓄音機をかけて三十くらゐの妻君連があつまり、お茶や氷菓を一日たべてゐた。さびしい雨の日は粉おしろいを床の上に撒いて、レコードに合してダンスをしてゐた。さうでなければ三時ころまで晝寢をして床の中から長い手を出して、何か讀んでゐるのが見えた。

「奥さん、ありますか？」

若い西洋人が時たまうしろの勝手口の小徑から這入つて来て、退屈さまに遊びに来るらしい浮いた調子でいふことがあつた。

「奥さん、今ありません。」

日本の女中は笑ひながらさう答へた。

町の方で毎日オクシヨンが初まり、三時ころにはその銅鑼を叩く音が秋本の家へまで聞え、裏山にさわぐ風の音が妙に木の葉の裏を返させる吹き方をした。

向ひのウインの奥さんは露臺へ産後の蒼白い皮膚をして、輕井澤で生れた赤ん坊をあやしなから、子守唄をうたつてゐたが、日本のゆかた着の胸をはだけ、大きな胸をあらはしてゐる姿は凄艶だつた。

「ハツセイ！」

と、兄の方の子供を呼び、妹の方を「エステル！」と呼んだが、ハツセイエステル、ハツホオ、ハツホオ、と閑古鳥のやうな聲だつた。

うちの朝子はいつの間にか、庭へ下りて出て、

「エステル、ハツホオ、ハツホオ！」

と、眞似て呼んだ。

「けふ町へ出ますと皆かへる方ばかりですね、どのひと嬉しさうですよ。」